

小山吉之助先生を偲んで

山口 徹

小山先生と最初にお会いしたのは私が本学に赴任してから間もなくのことであった。もう二十数年も前のことなる。当時は戦後の学制改革で新制大学として再出発した本学がようやく拡充の第一歩を歩みだした時期であり、七号館にはじまる建設の槌音が響き、大学に来るたびごとに大学の景観が変わっていたことを思い出す。

当時は法経学部と工学部の二学部で、教授会も学長が主催する全学教授会があるだけであった。研究室は現在情報センターになっている旧図書館に併設されていて、その一階の東北の角に法経学会の部屋があった。研究室も手狭で学部教授会がなかったため学会の部屋が唯一の集会の場所であり、私達の交流の場所であった。そんな訳で昼休みや授業の合間には出校して来た先生方が、とまり木よろしく学会の部屋に集まり、お茶をのんだり、お互いに議論をしたり、雑談に花を咲かせたものであった。いきおい専門外の諸先生の話しを聞くことも多く、また専門外の先生方に自分の研究を気楽に聞いていただくこともあった。

小山先生とのつきあいもこうしたサロンの環境のなかではじまった。その当時、私は豪農や商家に残されている経営帳簿を情報資料として利用し、豪農経営や商家の経営を分析することによって幕末から明治初期にかけての歴史の発展を研究していた。当然、帳簿を分析するためには諸帳簿の性格、そこに表現されている数値の意味を知る必要が

あった。簿記や会計学上の知識のほとんどない私にとって、簿記や会計を専門にしておられる小山先生は、ただで教えを乞える得がたい先生であった。現在も経営帳簿の分析は続けているが、その能力はその当時、サロンの雰囲気の中なかで小山先生から教えられたことが多い。

今も私の研究室の机の上に小山先生からお貸しいただいた西川幸次郎著『簿記史談』が置いてある、この本は会計学者がなした最高の簿記史であり、この本を枕に歴史学の立場から簿記史を研究して見たらとの注釈つきで貸していただいたものである。簿記史をまとめることを先生と約束したわけではないが、簿記史が出来あがった時に返せば良いと言われた先生の言葉に甘え、今日まで返さずじまいにしてしまった。今となっては返す主もなく、先生の言葉だけが重く残されてしまった。

大学が拡充され、研究室も、研究体制も、学部の組織も大学らしく充実してくると、専門を異にする研究者がなんとなく集まり、楽しく議論をし、学問論をたたかわせ、人生を語り合ったサロンの雰囲気は大学から消え、先生との学問的つきあいもとだえてしまった。専門を異にする研究者とのかかわりの中で偶然に出会う学問的緊張感も、努力をしないと得られなくなってしまう。それを求める心が私の専門とはかなり離れた距離にあった日本常民文化研究所を本学に招致し、それをささえていく努力を私になさしめたのかも知れない。狭い研究室、研究領域にとじこもりがちなの若い研究者を見ると、学部、学科を越えて交わりを持ち得た当時の本学の環境が私に与えた意味はあまりにも大きい。

小山先生との学問上のおつきあいはあまり多くはなかったが、学問以前のおつきあいはかなり多かったように思う。その中で、先生が土を愛し、野菜作りを通して自然とともに生きること喜びを求め、そこに自己を解放する人間味豊かな人格の持ち主であることも知らされた。その心が会計学者としての先生の学問とどのように結びついているの

か、残念ながら聞く機会を失ってしまった。ただ先生が学生を愛情をもって厳しく指導し、ラグビー部の学生と親しく接している姿を見ると、そのなかにその解答がかくされているように思えてならない。学問も教育も、野菜と同じように自然や人間を愛する心をもってやらなければだめだと先生は言いたかったのかも知れない。

私は本学に赴任してから二十数年、優れた学問の心と自然を愛し、学生を愛する素朴な人格を相知ることをゆるされました。先生の学恩に感謝し、先生からいただいた手作りの野菜の味を舌に感じながら、この一文を書かせていただきました。